

## 行事予定 (2014年)

- 3月 8日(土) 第1回常任幹事会
- 5月25日(日) 第83回教育セミナー  
予定
- 5月30日(金) 第2回全国幹事会
- 5月30日(金) 第4回生涯教育講習会
- 5月30日(金) 第24回日本臨床検査  
~31日(土) 専門医会春季大会
- 5月31日(土) 第44回日本臨床検査  
専門医会総会
- 7月24日(木) 第31回臨床検査振興  
セミナー
- 9月27日(土) 第2回常任幹事会
- 11月22日(土) 第3回全国幹事会  
予定
- 11月22日(土) 第45回日本臨床検査  
予定 専門医会総会
- 2月20日(土) 第3回常任幹事会

## 巻頭言

日本臨床検査専門医会  
全国幹事 下 正宗

### 専門医制度について考える

2017年を目途に、基本領域といわれる専門医分野が、新たに総合診療科を加え、「制度化」されようとしている。

2004年に卒後臨床研修は必修化された。このときは、国が制度設計をおこない、公費が投入された。国民のニーズに応じることができるよう医師を養成しようという理想に燃えた変革であったが、医療の抱えていた諸問題を顕在化させることになった。このために制度そのものに否定的な意見が出された。しかし、マイナーチェンジはありつつも医師養成課程の中では定着してきたといえる。

すなわち、建前上は、国民が求める医師の基本的能力をすべての臨床医が具備すべく、臨床研修が行われるようになった。「自分は、〇〇科なので、××はできない」ということは基本的な領域においては言えなくなったといえる。しかし、本当にできるようになったかどうかの証明は、各プログラムに任されておられ、国家試験のように、国のお墨付きがあるわけではない。そういう意味では、初期研修の質の管理についての課題があり、第三者評価の必要性が求められており、民間のNPOであるが、卒後臨床研修評価機構の役割は大きいといえる。

初期研修の次に話題になってきたのが、専門医である。国民の「専門医志向」、「専門医って何?」という疑問から発して、さまざまなレベルで議論され、基本領域の専門医制度を整備するという事になった。これも卒後臨床研修に劣らず、医療供給体制に大きな影響を及ぼす制度である。専門医制度は、もともと学会という任意の社会团体がプロフェッショナル・オートノミーに基づき維持、発展してきたシステムなので、国が介入せず、最初から第三者機関を設置し運営することになった。専門医育成の枠組みを第三者機関が作り、そのガイドラインに沿った形で各学会が専門医養成のためのプログラムを作成することになる。そして、第三者機関が認定医の認証のための試験を実施することになる。このための準備にどの学会も大変な努力をしている。そして、いわゆる、基本領域専門医の上に存在している分野の専門医制度も大きく変わりつつある。大きな流れとしては、国民に対する説明責任としてふさわしい方向と考えるが、ひとりひとりの医師にとっては、さまざまな道を選択できる可能性が狭まり、初期研修終了後は、19の領域のどれかのプログラムに所属しなければならない状況になる。これまでは、しばらく勉強してみて、自分の適性に合わないと思えば、よりふさわしい分野に変更することは比較的容易であったが、おそらく、新制度ではかなりハードルの高い進路変更になると考えられる。医師のキャリア教育の不十分さはこれまでも指摘されてきたが、これからは、従来の価値観をとりはらった形でのキャリア教育が求められる時代がくると考えられる。

### 【目次】

- p.1 巻頭言：専門医制度について考える
- p.2 事務局からのお知らせ、平成26・27年度会長・監事選挙結果のお知らせ、平成25年度第二回(第32回)総会報告、平成25年度講演会報告、平成26年度行事予定、平成26年度第24回春季大会のお知らせ
- p.3 会費納入について、住所変更・所属変更に伴う事務局への通知について、第2回「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」の報告
- p.4 「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」に参加して、会員の声：臨床検査専門医試験を終えて、これから宜しくお願いいたします!
- p.5 (会員の声)臨床検査専門医になって
- p.6 (会員の声)Esperanza、編集後記

JACLaP NEWS 編集室 増田 亜希子(編集主幹)

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学医学部附属病院 検査部内

TEL: 03-3815-5411 内線 37477/Fax: 03-5800-8806

E-mail: [amasuda-thy@umin.ac.jp](mailto:amasuda-thy@umin.ac.jp)

【事務局からのお知らせ】

《会員動向》

2014年1月14日現在数736名、専門医589名

《新入会員》（敬称略）

山岸 由佳：愛知医科大学病院感染症科・感染制御部

《所属・その他変更》（敬称略）

湯地晃一郎：旧 東京大学医科学研究所附属病院内科 助教

新 同 抗体・ワクチンセンター 特任講師

河野 幹彦：旧 自治医科大学さいたま医療センター

臨床検査部

新 常陸大宮済生会病院

《退会会員》（敬称略）

吉田 克己：東北大学大学院医学系研究科保健学専攻

検査技術科学コース病態検査学分野

置塩 達郎

新村祐一郎：中東遠総合医療センター

宮井 潔：大阪大学名誉教授

橋本 琢磨

窪田 良次：香川大学医学部・地域包括医療学講座

只野壽太郎

木藤知佳志

田中さゆり：複十字病院

《新入賛助会員》

一般社団法人 日本健康倶楽部

大阪健康倶楽部 関山診療所

【平成26・27年度会長・監事選挙結果のお知らせ】

平成26・27年度会長・監事選挙の結果をお知らせします。

会長選挙結果

有効投票数 253票

佐守 友博 240票(95%)

幹事選挙結果

有効投票数 509票

1位 土屋 達行 68票

2位 高木 康 60票

次点 高橋 伯夫 18票

選挙管理委員会 委員長 三宅 一徳

【平成25年度第二回(第32回)総会報告】

平成25年度第二回総会は10月31日(木)に神戸国際会議場にて開催されました。

審議事項

第一号議案 箕浦 俊夫先生を有功会員に推薦

第二号議案 平成26年度予算について

第一号議案、第二号議案は承認されました。

報告事項

1. 会長・監事選挙 結果報告
2. 平成25年度中間会計報告

3. 各種委員会ならびにワーキンググループの活動報告
4. 第60回日本臨床検査医学会学術集会 共催シンポジウムについて
5. 第60回日本臨床検査医学会学術集会 委員会特別企画(チーム医療WG)について
6. 第24回春季大会案内

【平成25年度講演会報告】

平成25年度第二回総会に引き続き、平成25年10月31日(木)、神戸国際会議場にて講演会が開催されました。佐守友博会長が、「臨床検査医の職能を発揮するために」と題し講演を行いました。

【平成26年度行事予定】

平成26年度 日本臨床検査専門医会の行事予定をお知らせいたします。

開催日時、場所の変更が生じる場合があります。変更があり次第JACLaP WIRE、JACLaP NEWSでお知らせします。その都度ご確認ください。

平成26年

- 1月25日(土) 第1回全国幹事会  
(日本臨床検査医学会事務所)
- 3月8日(土) 第1回常任幹事会  
(日本臨床検査専門医会事務局)
- 5月25日(日) 第83回教育セミナー(慶應義塾大学)(予定)
- 5月30日(金) 第2回全国幹事会  
(北海道大学医学部学友会館 フラテ)(予定)
- 5月30日(金) 第4回生涯教育講習会  
(北海道大学医学部学友会館 フラテ)(予定)
- 5月30日(金)~31日(土)  
第24回日本臨床検査専門医会春季大会  
(北海道大学医学部学友会館 フラテ)
- 5月31日(土) 第44回日本臨床検査専門医会総会  
(北海道大学医学部学友会館 フラテ)(予定)
- 7月24日(木) 第31回臨床検査振興セミナー  
(東京ガーデンパレス)
- 9月27日(土) 第2回常任幹事会  
(日本臨床検査専門医会事務局)
- 11月22日(土) 第3回全国幹事会(福岡国際会議場)(予定)
- 11月22日(土) 第45回日本臨床検査専門医会総会  
(福岡国際会議場)(予定)
- 12月20日(土) 第3回常任幹事会  
(日本臨床検査専門医会事務局)

【平成26年度第24回春季大会のお知らせ】

大会長 清水 力

(北海道大学病院検査・輸血部長、准教授)

開催日時：平成26年5月30日(金)、31日(土)

開催場所：北海道大学医学部学友会館「フラテ」

## 【会費納入について】

平成 26 年度の会費振込用紙をお送りしますのでお振込をお願い致します。尚、未納分のある会員の方々は合計額をお振込ください(納入状況は振込用紙に記載致します)。

尚、平成 25 年度より、満 70 歳以上の正会員の年会費は、5 千円となりました(平成 24 年 11 月 29 日 会則改定)。

平成 26 年度年会費 : 1 万円

平成 26 年度年会費(平成 26 年 1 月 1 日現在、

70 歳以上の方) : 5 千円

郵便振り込み口座 : 00100-3-20509

加入者名 : 日本臨床検査専門医会事務局

ご自身の振り込み状況が不明な先生は、事務局まで E-mail または FAX でお問い合わせください。

## 【住所変更・所属変更に伴う事務局への通知について】

住所・所属の変更に伴って JACLaP WIRE など電子メールの連絡や定期行物が届かなくなる会員がいます。勤務先、住所および E-mail address 等の変更がありましたら必ず事務局までお知らせ下さい。変更事項はホームページから【会員情報変更届】をダウンロードしてそれに記載し、FAX あるいは E-mail で日本臨床検査専門医会事務局宛てにお送りください。

## 【第 2 回「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」の報告】

昨年 11 月 2 日夕刻、神戸での日本臨床検査医学会学術集会において、今回で 2 回目となる「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」が検査医学会主催、専門医会と日本医師会共催で開催されました(下記)。昨年の反省点を活かして形態を少し変更しましたが、出席者にはまずまず喜んでいただけたかと思えます。簡単にその概要を報告させていただきます。

「若手」として参加いただけた方は計 25 名(男 12、女 13)、そのうち医師 24 名(専門医取得者 3 名)、学生 1 名でした。5 名は昨年にも参加いただいた方でした。「若手」の後見人を含むオープン参加の「先輩医師」は 16 名でした。若手参加者には、講演者の小倉加奈子先生・三宅紀子先生編著による「研修医のための臨床検査・病理超マニュアル(羊土社)」を資料として譲渡し、学生には旅費を支援しました。

まず、村田学会理事長に会の主旨説明、若者を歓迎する熱い想いを語っていただきました。村田先生には懇談会最後までフル出場いただき、若手が学会のトップと身近に意見交換ができました。佐守専門医会会長にもユーモアあふれたご挨拶をいただきました。

この会は医師会の女性医師支援プロジェクトの延長に位置するため、基調講演を女性の先輩医師にお願いしました。最初に、順天堂練馬病院検査部長の小倉加奈子先生が、病理専門医から検査専門医を獲得された経緯、若い検査部長(mid thirty!)としてどのように検査部を切り盛りされているか、自己啓発のための取り組みなどをプレゼンされました。プライベートを含めご多忙なのに悲愴感は全く感じられず、楽しんでお仕事されているご様子が印象的でした。病理医であることが主ですが、検査医を併せもっていることのメリットを強調されていました。小倉先生の病院では初期研修医が選択

として臨床検査部にローテートしていますが、超人気だそうです。

2 番手の三宅紀子先生(専門医増加 WG チーフ)は、内科研修、大学の臨床検査医、現在の開業医までの歩みをご紹介される中で、常に臨床検査の重要性・有用性を考慮されてきたことをお話しくささいました。個人医として開業されていますが、なんとコンパクトな自動分析機を導入し、大方の基本検査を 20 分以内で実施し、プライマリケアにおける基本検査利用を実行しておられます。当然クリニックは大盛況とのこと。担当理事の北島先生曰く、「こんな少ない人数で聞くのは勿体ない」と。両先生の共通のメッセージ、「検査医を取得するとこんなメリット、可能性がある」、が「若手」に響いたと信じます。

さて、懇談会のほうですが、昨年は「若手」と「先輩医師」をお見合いのような形の席に配置し、それもマイクを持った堅苦しい意見交換となり、教室の後輩 K 女性医師から、「身近なコミュニケーションができなかった」とお叱りを受けました。その反省から、今回は立食パーティーのような形式としましたが、打ち解けた雰囲気です。若手と先輩、若手同士での意見交換ができました。会は全体で 2 時間ほど、遅くまでお疲れ様でした。

将来的には「若手」の間だけで人間関係を築いていただき、情報交換ほかいろいろなことに役立てていただけたらと思います。そして「若手」のほうから「先輩」に対して問題提起するようなことがあればより実りある会になると思います。

専門医制度の見直しにより、本専門医の受験者数つまりはこの分野への参入者数がどのようになるかきわめて不透明です。これまでに増して人材確保がこの分野の最優先課題であることは論を待ちません。今回参加いただいた「若手」の方々には大きな期待が寄せられます。一方、我々「先輩」はこの方々を適切に育て、新規勧誘にも腐心しなければなりません。その試みの一つとして「若手の会」はしばらく続けていけたらと考えております。

最後に、参加された「若手」・「先輩」医師、裏方を務めてくださった学会事務局の森戸様に深謝します。

(山田 俊幸 日本臨床検査医学会教育委員会委員長、  
自治医科大学臨床検査医学)

---

日本臨床検査医学会教育委員会・日本医師会

日本臨床検査専門医会 共催企画

「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」

日 時 : 平成 25 年 11 月 2 日(土) 18:30~20:30

会 場 : 神戸国際会議場 401 号室

司 会 : 山田 俊幸、菊池 春人

プログラム

1. 挨拶

村田 満(日本臨床検査医学会理事長)

佐守 友博(日本臨床検査専門医会会長)

2. 先輩女性医師による臨床検査医学のイントロダクション

小倉加奈子(順天堂練馬病院臨床検査科)

三宅 紀子(八潮駅つばめクリニック)

3. 若手医師の自己紹介

4. 出席者全員による意見交換会

---

## 【「臨床検査を学ぶ若手医師の集い」に参加して】

若手医師の集いに参加させて頂き誠にありがとうございました。救急センター併設市中病院で臨床検査専従医として勤務しておりますが、普段は聞けない様々な事を聞けて大変勉強になりました。臨床検査における医師の役割は病院によって異なり、それぞれの立場で仕事を確立されている講演を伺う事ができ参考にさせて頂きたいと思います。今後とも何卒宜しくお願い致します。

(鈴木 広道 筑波メディカルセンター病院臨床検査医学科)

## 【会員の声】

### 臨床検査専門医試験を終えて

今夏、晴れて臨床検査専門医の仲間入りをさせて頂きました田中裕滋(ゆうじ)と申します。現在、近畿大学医学部附属病院の臨床検査医学教室に所属しております。この度は、

【会員の声】の執筆の機会を与えて頂き誠に有難うございます。自己紹介と臨床検査医学の世界に入ってきて現在までの経過をまとめてみようと思います。

私は、1994年に三重大学医学部を卒業し、旧第三内科(現消化器肝臓内科)に所属していました。四日市社会保険病院に赴任し、二年半、内科医としてただひたすら診療に励んでおりました。その頃、第三内科には近畿大学よりビリルビン代謝が御専門の足立幸彦先生が教授として就任されて、大学院への入学の機会を与えて頂きました。大学院生として、臨床ではC型肝炎・肝硬変や肝細胞癌の診療が中心ですが、研究面では肝臓医の中ではマイナーな肝代謝の世界に飛び込みました。体質性黄疸であるGilbert症候群やCrigler-Najjar症候群は、昔は単に間接ビリルビンの増加した疾患と認識されていたものが、現在では両疾患とも滑面小胞体膜に存在するグルクロン酸抱合を担うUDP-glucuronosyltransferase1A1(UGT1A1)の変異による酵素活性の低下が原因であることが明らかとなっています。このUGT1A1はビリルビンのみならず薬剤のグルクロン酸抱合も担っているため、最近ではUGT1A1が抗がん剤イリノテカン塩酸塩水和物の代謝に関わることで、本遺伝子の遺伝子多型によるグルクロン酸抱合能の低下で好中球減少や下痢などの重篤な副作用の発現率が高くなることが報告されています。2008年11月にはUDPグルクロン酸転移酵素遺伝子多型検査が保険適用となり遺伝子多型を測定することにより副作用発現の可能性を予測し、より適切な抗がん剤治療が行われています。抱合型ビリルビンは、肝細胞の毛細胆管側膜に存在するmultidrug resistance-associated protein(MRP)2により胆汁中に排泄されます。直接ビリルビンの増加したDubin-Johnson症候群では、MRP2の遺伝子変異による基質輸送活性の低下が原因であることが特定されています。また閉塞性黄疸や肝硬変末期の黄疸患者では、MRP2の発現は低下し、肝細胞の類洞側膜に存在するMRP3の発現が増加することで血中抱合型ビリルビン濃度が上昇することが明らかとなっています。院生時代は、このような内因性基質であるビリルビンや異物である薬物の肝臓における代謝の研究を進めてきました。その後、2003年4月より渡米し、カンザス大学メディカルセンター薬学部のKlaassen教授の下で薬物代謝関連遺伝子のみならず、肝臓を中心とした核内レセプターや転写因子に着目して種々の肝障

害モデルについて検討し、帰国前頃より非アルコール性脂肪肝炎(NASH)の分野へ研究テーマを広げました。2007年8月に米国から帰国するに際して、ビリルビン代謝の研究でお世話になっていました近畿大学医学部臨床検査医学の上裕俊法先生の教室に着任することとなりました。その後、主に臨床検査医学の教育に取り組み、その傍らでNASH、脂質胆汁酸代謝の分野で研究を行っております。

ようやく臨床検査専門医の受験資格の条件も整い、今年、受験することと相成りました。昨年及び今年の教育セミナーに参加し、幅広い知識が必要であることを再認識しました。当院の中央検査部の多くの臨床検査技師さんより細菌検査、輸血検査、マルク等の勉強をさせて頂き、有意義で素晴らしい機会となりました。この場をお借りして感謝申し上げます。試験勉強は、願書提出後より必要な教科書や資料等を準備し、7月頃からは本格的に学習時間を何とか確保しました。しかしながら、いくら学習しても合格する気がしなくて、なかなか厳しいものではありませんでした。私は、試験会場である兵庫医大には電車で50分で通える所に住んでいます。特に宿泊する必要もなかったのですが、甲子園では高校野球で盛り上がり上がっている最中にスーツケースいっぱい本や資料を詰め込んでホテルに宿泊しました。試験当日は緊張し、3時間の筆記試験はぎりぎりの時間でした。翌日の実技試験は、受験生の人数よりも試験監督の先生の方が人数が多いのではと思ひ、プレッシャーを感じる試験でした。

今年の試験の日程がお盆の頃と決定したことを知り、夏休みを9月を取ることにして、9月6日よりトルコに外遊して参りました。合格発表をトルコの地で知ることになると知ったのは、試験が終わってからのことでした。旅先で合格発表をネット上で確認しようとしたのですが、発表予定の9月10日火曜日に私のパソコンでは確認できませんでしたので発表が遅れているのかと思っていました。結局、旅行中に確認できず土曜日大学に出勤しメールを開けましたら、教育セミナーでお知り合いになった先生方の祝福メールで合格を知り、ほっとしました。

専門医になって現在の抱負としては、まず、これまで教授先生にお任せしてきた検査部の運営や管理について学んでいくことが挙げられます。また、検査技師さんとの交流を深め、日常の臨床検査で出てくる疑問点について共に考えて行く機会として研鑽を積んで行きたいと考えています。学生指導に関しては、これまで幅広く肝代謝の研究をしてきた経験を生かして、分子生物学的な知識も織り交ぜて学生に講義をしたいと思ひます。国家試験には出ない知識となるかもしれませんが、少しでも暗記に頼らない理論を理解した知識を身に付けてもらえるように頑張りたいと思ひます。さらには、領域が重なる他科の先生の説明にはないような検査医学の特徴や醍醐味を備えた講義をできるように、日々、ブラッシュアップして行こうと思ひます。

臨床検査医学の分野では、まだまだ未熟ではございますが、諸先生方には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

(近畿大学医学部臨床検査医学 田中 裕滋)

これから宜しくお願いいたします!

はじめまして。私は2013年に臨床検査医学会専門医の仲間

入りをさせていただきました旭川医科大学の生田克哉と申します。

まず簡単に自己紹介をさせていただきます。私は 1995 年旭川医科大学を卒業後、すぐに第三内科(消化器+肝臓+胆膵+血液)に入局し、同時に大学院に入学しました。かなり昔です。今とは状況が大きく異なりますが、研修医として各グループでなんでも雑用をさせられながら指導を受けて過ごし、その後は肝臓内科のグループで臨床・研究を行ってまいりました。1999 年に米国 NY 州に留学する機会をいただきまして、途中でテロなどあって大変でしたが、何とか無事に戻ってきて、その後はずっと大学に所属していますが、帰国時にいきなり血液グループに配属転換されました。血液内科などほとんどわからなかったのですが、やらなきゃならないと思うと意外と勉強も進むもので、時間はかかりましたが、今では血液内科が一番の専門となっています。こう書いてきますと、じゃあ何故臨床検査専門医をとろうとしたのか、という点が疑問になってくると思います。もちろん、血液内科ですから、骨髄像や輸血をはじめ、各種の特殊な検査に直接携わることは他の領域の臨床医よりも多かったのですが、当院の臨床検査・輸血部の部長がもともと肝臓外科医で、以前からずっとお世話になっている先生であるという点も大きく、臨床検査医学という観点からいろいろなことに携わらせていただくようになりまして、検査部内の各部署をちょろちょろさせてもらっております。これは本当に幸運なことで、検査技師さん達との discussion から診断のヒントをもらうこともありますし、私にとって非常にためになっています。

もう一つ、私が臨床検査と色濃くかかわっているのは、研究の分野があります。私は大学院生の時代から一貫して生体内鉄代謝に関する研究を行っています。もともとは細胞膜表面での鉄関連分子の接着などに関する非常にマニアックな研究が主体だったのですが、近年は生体内鉄代謝調節因子ヘプシジンの血清における測定系を LC-tandem MS を利用して構築したり、さらに最近では、鉄過剰状態の際に血液中に出現してくる非トランスフェリン結合鉄(non-transferrin-bound iron: NTBI)というものの測定を生化学自動分析装置で可能にしてきており、臨床検査医学会でも発表させていただいております。こうした研究は、実験室だけではなく、実際の検査部で行わせていただかなくてはならないのですが、当院は若くてやる気のある検査技師さんが多く、これ以上ないくらい協力してもらっておりますので、非常に研究がスムーズに進んでいて、助かっております。これらもマニアックな領域ではありますが、特に輸血後鉄過剰症に対する鉄キレート療法は近年幅広く行われておりますし、そうした際に NTBI などをモニタリングする臨床的意義などを今後検討していきたいと考えていますし、この点は当院の特色にしたいと考えています。

このように、臨床検査部に直接ご所属になられている先生方とは少々異なる形で臨床検査医学に関わらせていただいている私ですので、正直、専門医試験は難関でした。これまで、内科、血液、肝臓、消化器、消化器内視鏡、がん薬物療法、輸血などの分野で数多く試験を受けてきましたが、実は一番大変だったのではないかと思います。記述もさることながら、やはり実技試験が苦しかったです。ただ、本学会がここまで認定に対してしっかり取り組んでいるという姿勢は強く感じましたし、合格させていただいたので、その認定証の重みを感じており、それに恥じることはないようにしなくてははいけ

ないと思っております。

今後に関しては、個人的には先述の鉄に関する新規マーカー測定系の研究を推し進める一方で、私はまだ血液内科医としても動いておりますので、血液内科を含む幅広い臨床領域と、実際の臨床検査部との連携がさらに密にできるよう、微力ながら努力していこうと考えております。

甚だ浅学な身で恐縮ではございますが、今後何卒ご指導の程よろしくお願いいたします。

(旭川医科大学第三内科 生田 克哉)

## 臨床検査専門医になって

私、2013 年度認定新人専門医でございます。1988 年高知医科大学(現高知大学医学部)を卒業し、同大学老年病科・循環器科に入局。神戸市民病院、London 大学 St. George's Hospital Medical School などを通じて、一貫して内科学・循環器学・心エコー図学を専門としてまいりました。医局の心エコーチーフとして、当院検査部でエコーの施行・指導、超音波検査士の養成に携わっておりました。2012 年 12 月から、病態情報診断学講座・検査部教授 杉浦 哲朗先生に呼ばれまして、准教授・副部長として勤務しております。

検査部で勤務する以上は専門医認定を受けようと決意し、慶應大学でのセミナーを受講。その範囲の広さと深さに圧倒されながら、苦手な血液、輸血、微生物など特に検体系を中心に勉強しました。実技については、当院検体部門の技師さんに大変お世話になりました。8 月、兵庫医科大学での 2 日間の試験を終え、精根尽き果てて伊丹空港で帰りの飛行機を待っていたことを思い出します。幸いにも、滑り込みセーフで合格を頂きましたが、過去受験した内科専門医、循環器専門医、超音波専門医、老年医学専門医とは比較にならない難しさでした。

さて、心エコーという私の専門領域から検査部門を眺めますと、臨床・教育・研究面でいくらか戸惑いがあります。日本と異なり、米国・英国・カナダなどでは検査部門は検体検査のみを担当します。米国臨床検査専門医(臨床病理医 Clinical Pathologist; American Board of Pathology 認定)の担当範囲に心エコーは含まれません。驚くべき違いです。すなわち、米国では循環器・超音波専門医が、検査部門で検査専門医として勤務することはないのでしょうか。さらに、心エコーの研究成果を発表する検査医学関連の国際学会が見当たりません。世界病理学・臨床検査医学会連合(WASPaLM)でも生理検査領域はなさそうです。米国では、検査技師(Technologist)とは全く別の教育課程で資格を取得したエコー専門技師(Sonographer)(所属は循環器科)が、心エコーだけを担当します。日本の循環器科医は、米国を模倣して「Sonographer の養成が大事」と説きますが、日本の検査技師の担当範囲は広く、検体系へのローテーションという難しい問題もあります。

しかし、逆に考えますと、日本の臨床検査専門医(Clinical Laboratory Physician)および検査技師は、生理検査を含む広範囲な領域で活躍するチャンスを与えられております。欧米主要国にはない、検体系・生理系を含めた広い守備範囲と実力を兼ね備えた臨床検査専門医・検査技師が協働して、社会にあるいは医療機関の中で貢献できるよう、新人 Clinical Laboratory Physician として微力ながら努力してまいります。ご指導ご鞭撻のほどどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(高知大学医学部病態情報診断学講座 松村 敬久)

## Esperanza

聖マリアンナ医科大学の信岡と申します。私は 1980 年に聖マリアンナ医科大学を卒業し、循環器内科、総合診療内科を経て、2008 年より附属病院の臨床検査部長の職にあります。当院の臨床検査部は、輸血部、血液・遺伝免疫検査、医科学検査、生理機能検査、緊急検査、細菌検査、採血室、超音波検査、事務部門に分かれ、臨床検査技師、診療放射線技師、看護師、事務職員などパート職員も含めると 100 名近いスタッフで運営されています。日常の検査業務を着実、堅実にこなすことを基軸として、医学・医療者教育、人材育成、多職種連携とチーム医療に力を入れていきたいと考えております。

さて、かなりの大所帯の検査部の運営を円滑に進めるための一助として、数年前に部内報を発行することを思い立ちました。A4 版表ウラ 1 枚の簡単なもので、PC で作成し、写真はデジカメ、医局でやや上質の紙に両面コピーして作っています。簡素なものですが、優秀な編集部員のおかげで、現在までに定期 11 号(季刊)+増刊号 2 号を発行しております。

部内報の名前は Esperanza と言います。“Esperanza”とはスペイン語で「希望」という意味です。数年前に起こったチリの鉱山事故の際にも話題になりました。どんなときでも希望を失わないでという意味もありますが、個人として、組織として成長したいという願いも込めています。

Esperanza の目指すところは、①成長や進歩を常に意識してもらいたい、そのことで、組織と個人に緊張感を与える、②原稿を書くことで、書く力(文章力)を鍛える、③言語化することにより、自分自身の課題の発見につながる、④各個人が持つ潜在的な能力、知識を引き出す、⑤情報を共有する、などです。

内容は、①TOPICS：できごと、話題など、②がんばったひと、勉強したひと：講習会、セミナーへの参加記録、学会発表・誌上発表、資格取得、など、③自分の仕事：部署の仕事、自分の仕事のおもしろいところや難しいところについて書いてもらう、④こんな工夫をしている、ここに気を付けよう、⑤そのほか、少し軽い話題として、「あなたに薦めたいこの一冊」、「精鋭たちへの伝言(退職者から後輩へ伝えたいこと)」、「旅行記」や「ここは旨い！」(おすすめのお店)、「My Hobby」、「My Best Shot」、「お元気ですか(退職者の近況報告)」などです。

臨床検査部所属の職員の方に原稿を書いてもらっていますが、出来上がったものをみると、検査部スタッフの意外な一面を知ることができたり、コミュニケーションの向上に役立つ

っています。最近では院長室や看護部など院内の他部署にも届けるようになりました。

組織を動かすのは人であり、人材育成なくしては組織の将来はありません。引き続き努力を重ねていく所存ですので、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(聖マリアンナ医科大学臨床検査医学講座 信岡 祐彦)



## 【編集後記】

ようやく寒さも和らぐようになってきました。今年の冬は、大雪が印象的でした。昨年も大雪だと思っていたのですが、今年はさらにその上をいく大雪で、私は連日自宅の雪かきを行い、筋肉痛になってしまいました。わずかな期間ではありますが、雪国の大変さを実感しました。今年の冬は、ソチオリンピックも印象的でした。選手たちの素晴らしい演技に感動し、頑張る姿勢に勇気づけられました。

今号では、巻頭言を全国幹事の下正宗先生にお願いし、専門医制度に関してご寄稿いただきました。また、昨年秋の日本臨床検査医学会学術集会にて開催されました「第 2 回 臨床検査を学ぶ若手医師の集い」について、山田俊幸先生にご寄稿いただきました。鈴木広道先生からは、参加した感想をご寄稿いただいております。「会員の声」には 4 名の先生からご寄稿いただきました。田中裕滋先生、生田克哉先生、松村敬久先生には、研究テーマや専門医試験の感想についてご寄稿いただき、信岡祐彦先生からは部内会報誌についてご寄稿いただいております。私が JACLaP NEWS の編集を担当するようになってから 2 年が経過しますが、いまだに慣れません。信岡先生の体験談は、とても参考になりました。

今号も、多くの先生方にご寄稿いただきました。貴重なご意見を賜り、誠にありがとうございます。ご寄稿いただいた先生方に、心より厚く御礼を申し上げます。広く会員の皆様からのご寄稿をお待ち申し上げます。

(編集主幹 東京大学医学部附属病院検査部 増田 亜希子)

### 日本臨床検査専門医会

会 長：佐守友博、副会長：小柴賢洋(渉外委員会委員長)、東條尚子

常任幹事：池田 均(資格審査・会則改定委員会委員長)、菊池春人(教育研修委員会委員長)、木村 聡(広報委員会委員長)、

佐藤麻子、佐藤尚武(保険点数委員会委員長)、三宅一徳(庶務・会計幹事)、宮地勇人(情報・出版委員会委員長)、米山彰子

全国幹事：上原由紀、大谷慎一、萱場広之、河野誠司、紀野修一、清水 力、メ谷直人、下 正宗、末広 寛、杉浦哲朗、藤原久美、

松永 彰、宮崎彩子、村上純子、村田哲也、和田隆志、渡邊 卓

監 事：高木 康、土屋達行

情報・出版委員会：

委員長：宮地勇人

委 員：安東由喜雄、清水 力、信岡祐彦、福地邦彦、増田亜希子、盛田俊介

日本臨床検査専門医会事務局

〒101-0027 東京都千代田区神田平河町 1 番地 第 3 東ビル 908 号

TEL : 03-3864-0804 FAX : 03-5823-4110 E-mail : senmon-i@jaclp.org